

ポルトガル帝国史の現在： アジア進出期の植民史をどう理解するのか

齋藤 俊輔

1. はじめに

本稿は、本号の合同企画のテーマ「アジア地域研究動向」に寄せて、ポルトガル帝国の構造とその形成が現在どのように論じられているのかを検討するものである。

ポルトガルは15世紀初頭からイベリア半島における戦略上の目的や交易の機会をめぐって、大西洋に点在する島々やアフリカ西沿岸を探索し、拠点築いていった。それはやがてアジアへの進出につながった。16世紀になると、ポルトガルはアジア各地の港市を攻略し、海上交易に参入を果たした。17世紀以降、その影響力は次第に弱まっていくが、ブラジルやモザンビーク、アンゴラなどでは依然として有力で、19世紀にはいわゆる植民地を形成するに至った。こうして形成されたポルトガルの海外拠点は、一般的に「ポルトガル帝国」と呼ばれている。

ところで、ポルトガル帝国に注目するのはいくつかの理由がある。

まずポルトガル帝国は現代的な意味を持っている。第二次世界大戦後、ヨーロッパ諸国が築いた帝国は解体されたが、その枠組みは今も再生産あるいは再利用されている。ポルトガル帝国もそのほかではない。たとえば、1994年には、ポルトガル、カボ・ヴェルデ、ギニア・ビザウ、アンゴラ、サントメ・プリンシ

ペ、モザンビーク、ブラジルの7カ国が、「ポルトガル語諸国共同体」なる枠組みを創設した。同共同体は、ポルトガル語を公用語とする、それらの国々の経済的・文化的互惠関係を強化しようとするものであった。もちろんそうした国々の間では、以前から労働者の移動も活発であったが、近年ではポルトガル人が経済成長をつづけるブラジルやアフリカに出稼ぎにでることも珍しくない。一方、アジアでも、ゴアやマカオのように植民地統治時代の町並みや建築物が世界遺産に登録され、観光地として賑わっている都市もある。それぞれがさまざまなかたちでポルトガル帝国を活用しているのだ。

また、ポルトガル帝国の研究は近世史の進展に欠かせない。近年歴史学では、近世を世界帝国の時代として描こうとしている[山下2008：77-90、秋田・桃木2013：9-45]。15世紀以降、各地にオスマン帝国やムガル帝国などの超領域国家が形成されるようになったというのである。そうしてみると、ポルトガル帝国の形成も共時性をもっているといえる。言い換えれば、ポルトガル帝国の研究は近世史にひとつの事例を提供することになるのである。

もちろん、こうした近世史の問題提起は、ヨーロッパ世界の拡張と植民地主義の展開を含めた議論である。ただし、ポルトガル帝国

はヨーロッパ諸勢力と並列的に扱われているとはいいがたい。ポルトガル帝国の取り扱い、オランダやイギリスに先んじたという程度に過ぎない。しかし、新たな世界史観が生まれているなかで、より公平な視点からポルトガル帝国を見直すことは、ヨーロッパ世界の拡張を再考するきっかけになろう。

このような観点から本稿はポルトガル帝国に注目するが、そのなかでもアジア進出期に焦点を当てる。アジア進出期がポルトガル帝国が急激に拡大した時代だからである。

ところが、アジア進出期のポルトガル帝国にはしばしば「帝国」の体裁をとっていないという批判がある。もっとも多いのが、ポルトガル帝国は商業ネットワークに過ぎないという指摘だが、それは一面的理解というものであろう。

アジアに進出したポルトガルは、コーチンやゴアなどのインド西岸だけでなく、オルムズやマラッカなどに要塞や都市を建設し、活動拠点を作り出した。それらの点在する拠点はやがて一領国に統合された。領国は「ポルトガル領インド Estado da India」と呼ばれた。ポルトガル領インドには、本国から「総督(governador)」と呼ばれる司令官が派遣され、軍政や内政を取り仕切った²⁾。加えて、各地に官吏や兵士、入植者などが配置され、総督の領国運営を支えた。この統治制度は「総督制」と呼ばれ、ブラジル統治にも利用された。

つまり、アジア進出期のポルトガル帝国はたんなる商業ネットワークではなく、統治機構として理解できるのである。

ただし、その組織がどこまできちんとしたものであったのかは確かに疑問である。なかでも、ポルトガル帝国と移民や植民との関係はそれをはかる指標になりそうだ。たとえば、

羽田正は次のように述べている。

私的な貿易の多くは、ゴアの副王から許可を得たわけではないので、本来違法である。したがって、ときにこのような取引を禁止する命令がだされることもあった。しかし、現実的には、「公的な」ポルトガル人が限られた人員と船で非合法貿易を取り締まることは不可能だった。また、取り締まる側であるはずの役人たちも、しばしばこのような私貿易に手を染めていたのである[羽田 2007:62]。

さらには、

東インドで何とか運良く生き残り、現地の事情にある程度通じるようになった者たちの多くは、私貿易に関わり始める。もともと冒険者や荒くれ者で、自分の利益だけを考えるような人たちの集まりなのである。彼らは、インドの西や東の海岸、タイやビルマの沿岸、そしてマカオや長崎をはじめ東アジア海域の各地に拠点を築き、現地の商習慣に慣れ親しみ、現地の商人と一緒に商取引にいそむようになっていった。この傾向は、時が経つにつれて強まる。彼らにとって、エスタード・ダ・インドは自分たちとは関係なく、それほど大事なものではなかった[ibid:70]。

こうなると、ポルトガルのアジア進出イメージは、「帝国」とはまるで異なる。むしろたんなるディアスポラの拡大にすらみえる。アジアにやってきたポルトガル人は好き勝手に行動するばかりで、「帝国」という言葉がもつ統合性に欠けているのは明らかだ。

一方で、近年の研究では、まったく別の見解もある。ポルトガル人の移民や植民こそがポルトガル帝国を「帝国」たらしめる基礎だら

たという主張だ³⁾。

例えば、ニューイット Malyan Newitt は、最初の大規模な植民政策はゴアで試みられたとし、アジア進出をブラジルや大西洋での活動同様「植民帝国 (empire of settlement)」の形成と理解すべきだと主張している [Newitt 2005: 258-260]。

また、ラッセル=ウッド A. J. R. Russell-Wood は、「物理的なプレゼンス、つまり決定的な数のポルトガル人は一入植によって達成されたわけだが一、王室の政策を推進する上で非常に重要だった」と主張している [Russell-Wood 2007: 162]。

こうしたアジア進出期についての相反する見解をふまえると、ポルトガル当局がどの程度まで移民や植民を組織的に活用したのかどうかを再検討することが、「帝国」を理解するうえで重要な課題であると指摘できる。そうした検討の結果によっては、ポルトガルのアジア進出がそれほど場当たりのものでもないことが明らかとなり、最終的にそれを「ポルトガル帝国」と呼んで差し支えないという結論が導き出せるからである。

2. 研究動向

では、ポルトガル帝国史はどの程度までポルトガル人の移民や植民について研究を進めてきたのだろうか。はっきりいえば、ポルトガル当局と役人や定住者との関係を全体的にカバーする研究はまだない。そこで、本稿では移民や植民に関する先行研究をカザード、フロンティア、移民、勤務者に分類して整理したい。

カザード研究

これまでアジアにおけるポルトガル人の活動に関する研究は、「カザード (casado)」を主な対象としてきた。カザードとは、ポルトガル領インドで結婚し、定住したポルトガル人およびその子弟を指す。

カザードについては、すでにポルトガル帝国史の創成期から重要性が指摘されていた。[Boxer 1968]では、カザードがポルトガル領インドの市参事会 (camara) を運営する主体であったとし、ポルトガル帝国運営におけるひとつの核であったと指摘されている。しかし、当時は胡椒交易や海上支配のあり方が帝国史の一大テーマだったため、カザード研究は停滞していた。

カザード研究が本格化するのは1990年代以降であった。[Subrahmanyam 1993]では、ポルトガル領インドの人口構造においてカザードが圧倒的多数を占めることや、彼らがカントリー・トレードを通じてえた富が植民地運営に活用されていたことも明らかにされ、アジアのポルトガル帝国の存立上、カザードが決定的に重要だったことが指摘された。これによって、カザード研究の重要性が知れ渡ることになった。

そして、[Boyajian 1993]や[Melekandathil 2001]などをつうじて、カザードの経済活動がより詳細となった。ボヤジャン James C. Boyajian は、ハプスブルグ朝時代のポルトガル領インドにおけるカザードの商業ネットワークについて詳しい研究を残している。また、マレカンダティル Pius Malecandathil は、ポルトガル領コーチンのカザードがインド洋交易の結節点として機能していた点を再評価している。そうした研究によって、カザードは「交易者」と定義づけられるようになった [Newitt 2005: vi]。

一方で、カザードを植民政策の側面から検

討する研究も脚光を浴びるようになってきた。[Thomaz 1994]では、ポルトガル領ダマンを事例とし、同地のカザードがプラゾ(prazo)制度と呼ばれる、ポルトガル人に土地を与えて定住を促す政策とその制度の枠組みが示された。しかし、その研究も近年まで適切な評価を受けることはなかった。先に見たように、交易をめぐる活動に対する関心が高かったためである。それが最近になって、ポルトガル帝国の通史や概説でもアジアにおける定住政策に言及するようになってきた。なかでも、[Russel-Wood 2007]は、ポルトガル人の定住がポルトガル帝国の形成に決定的に重要だったと主張している。今後こうした研究が進み、やがてカザードが交易者だけではなく、植民政策の一環で生じた定住者として再評価されるのは間違いないだろう。

フロンティア研究

カザード研究の進展は、ポルトガル人がポルトガル領インドを越えて、アジア各地に定住したことを明らかにしていった。本稿では、便宜上そうした地域を「フロンティア」と呼ぶ。

フロンティア研究でも、スブラマニウム Sanjay Subrahmanyam の研究が先駆的であった。スブラマニウムは、フロンティアのポルトガル人をおおよそ3つに分類した。棄教者、傭兵、伝道者である。棄教者は、ポルトガル領インドを去り、イスラム教に改宗し、在地権力に取り込まれた者を指す。傭兵は、ポルトガル当局とのつながりを維持しながら、戦闘員として在地権力に仕えた者を指す。伝道者はフランシコ・ザビエルをはじめ、各修道会の布教活動を担った修道僧を指す。スブラマニウムは、そのような状態で、各地にフ

ロンティアが形成されていたことを指摘したのである[Subrahmanyam 1993:249-269]。

また、最近では、フロンティアは、「非公式帝国(unofficial empire)」や「民間活動(informal presence)」として解説されるようになった[Newitt 2005:121-123, Disney 2009:192-198]。

しかし、実際にはフロンティアを完全に「公式」と「非公式」に分けることはできない。ポルトガル当局はしばしばポルトガル人の民間活動を統治に活用したし、後者も前者の後援を受けたからである。

この点、わが国で進展するキリシタン研究は、ポルトガル帝国とフロンティアの関係をより公平な視点から捉えており、高く評価できる。たとえば、[高橋 2007]はイエズス会がポルトガル帝国の援助や政策を利用しつつ、独自の論理で布教を成功させていたことを具体的な事例とともに明らかにしている。

もちろん、キリシタン研究はイエズス会をはじめとする布教関連の史料によって綿密な研究が可能であるという事情があるが、その他のフロンティア研究でもポルトガル帝国の戦略や政策をふまえる必要があるのはいうまでもない。

移民研究

ところで、こうしたカザードやフロンティア形成の人的資源はどこから生じたのだろうか。当然のことながら、それはポルトガルからの出国者であった。

そうしたポルトガルからアジアへの移民に関しては、移民統計や移民の人口構成を中心に検討が進められていた。移民統計については、[Godinho 1978]や[Duncan 1986]の研究が重要とされる[Subrahmanyam 1993:217-219]。

とくに、後者はポルトガルからの出国者だけでなく、帰国者にも目を向けており、アジアへの定住者数も視野に入れた研究をしている [Duncan 1986:3-25]。また、移民の人口構成については、『16世紀前半における貴族とポルトガル領インディア (*A Nobreza e o Estado da Índia na primeira metade do século XVI*)』なるプロジェクトが進展中であり、一部の成果が [Lacerda 2004] で紹介されている。

加えて、移民徴募についてもいくつか研究がある。まずその全体像は、[Mathew 1988] に詳しい。同書では、徴募されたポルトガル人を登録する制度について詳細に論じている。さらに、徴募のより具体的な実態については、[Coates 1998] に詳しい。同書では、帝国が流刑者を植民地の兵士、いわば労働力として活用する一方で、孤児となった貴族の子女を当地に送り込み、現地のポルトガル人と結婚させることで、本国と植民地の一体性を高めていたことが明らかにされている。先の研究と補完的な関係にあり、十分評価できる⁴⁾。

それでも移民研究は立ち遅れているといわざるを得ないだろう。決定的なのは本国と植民地間の移動がどのように管理されていたのかがまったく検討されていない点であろう。とくに、出国者（移出者）にのみ関心があり、帰国者（移入者）に関心が向けられていない点は再考の余地がある。

ポルトガル領インディア勤務者に 関する研究

本国を出たポルトガル人はポルトガル領インディアに到着すると、多くの場合が兵士や官吏として当局に勤務することになった。そうした公的な当局の組織については、[Diffie & Winius 1978] や [ピアスン1984] などでも言及

されているが、概説の域を超えない⁵⁾。

ただし、官吏にかぎってみれば、近年プロソポグラフィが活用されるようになり、一部の役職に関して任務や登用などがある程度まで明らかになってきている。

[Russel-Wood 1992] では、総督の昇進パターンが分析され、循環的な人材登用によって、アジアだけでなく、ブラジルを含んだポルトガル帝国の統合が実現されていたことが指摘されている。また、[Correia 1997] は、マラバル海岸のポルトガル要塞に勤務する官吏の職務や任命状況などについて言及している。さらに、前出の [Lacerda 2004] では、インディア航路の艦隊に乗り込んだ総司令官や司令官職の被任命者が分析され、ポルトガルの社会構造との関係が明らかにされている。今後、官吏については、このような方法を積み重ねて、より詳細な状況が明らかにされることが期待できる。

一方、勤務者の大部分が属した軍隊組織については適当な研究がない。ディオゴ・ド・コウト Diogo do Couto や フランシスコ・ロドリゲス・シルヴェイラ Francisco Rodrigues Silveira などの16世紀の著作にもとづいた研究はあるが、偏った記述が目立つ⁶⁾。この分野では、まずは公文書などを利用した基礎的な研究が期待される。

3. おわりに

ここまでで確認できたように、はっきりいってそれぞれの研究は発展段階に差がありすぎる。それゆえ、筆者はそれぞれの対象について基本的な点を確認することが先決だと考える。

筆者ははじめにポルトガル帝国を考える際、

当局がどの程度まで官吏やカザードなどを組織的に活用したのかを考えるべきだと述べた。この点に立ち返ると、当局の制度や政策がどのようなものであったのかを確認しなければなるまい。そして、それとの関係で、官吏やカザード、あるいはフロンティアを考えるのである。研究段階に差があるという理由からだけでなく、政策や制度が帝国の統合性を確保するひとつの手段だったと考えるからだ。

しかし、筆者は官吏やカザードなどを完全に区別するのではなく、より大きな視点から包括的に理解したいと考えている。彼らが、ポルトガルからやってきて、当局に勤務したり、あるいは入植したり、新天地へ移住したりと多様な側面をもっているからである。つまり、筆者が対象としたいのは、官吏やカザードを含んだポルトガル人の全体像であり、さらにいえばその活動、あるいはその移動の諸相である。もちろん、官吏やカザードといった分類をもちいた分析は不可欠だが、その分類が暫定的なものであるというのは議論の前提となる。

以上をふまえ、筆者が想定する研究は以下のごとくまとめられるだろう。それは、官吏やカザードなどを含むポルトガル人の移動とポルトガルの政策や制度とを関連付けて分析するものである。それによって当局によるポルトガル人の活用がどの程度まで組織的なものであったのかが明らかとされる。これは同時にポルトガルのアジア進出が「帝国」と呼ぶにふさわしいのか否か結論を下すことになるだろう。

ただし、ポルトガル当局がポルトガル人をごんじがらめにしていたと主張するのは本意ではない。当局が打ち出す政策などにポルトガル人がどのように対応し、行動していたのかという点も意識して研究を進めたいと考え

ている。

注

- 1) ポルトガル語圏については、[市之瀬 2000、2004]に詳しい。とくに、ポルトガル語圏共同体については前者を確認されたい。
- 2) なお、総督に代わって「副王(vice-rei)」が派遣されることがあった。後者はより名誉があるとされるが、機能は同じである。
- 3) アジアの植民史では、[Forjaz & Noronha 2003]が最大の成果だろう。同書は、16世紀にはじまるアジアのポルトガル人の系図を丹念に収集し、再構成している。また、本邦でもブラジルにおける植民に関しては[浜岡 2006]がある。
- 4) コアテス Timothy J. Coates は、アジアのポルトガル人、とくにその大部分であった平兵士(soldado)の前歴をほとんど犯罪者とするが、同職にはフィダルゴ(fidalgo)やエスクデイロ(escudeiro)といった貴族の子弟もかなりの数含まれていた。
- 5) 後年、ピアスン Michael N. Pearson は、ポルトガル領インディアの勤務者について、より綿密に調査し、登用や給与制度の実態を具体的に示すだけでなく、交易の私物化などについても言及している [Pearson 1987:61-68]。
- 6) コウトやシルヴェイラはポルトガル領インディア統治の腐敗を糾弾するような記述が多い。軍隊についてもやはりかなりいい加減な運営状態にあったと指摘されている [齋藤 2010]。[Winius 1985]も参照にされたい。

参考文献

(外国語文献)

- Boxer, C. R. 1969 *The Portuguese Seaborne Empire 1415-1825*. Hutchinson & Co (Publishers) LTD.
- Boyajian, James C. 1993 *Portuguese Trade in Asia under the Habsburgs, 1580-1640*. The Johns Hopkins University Press.
- Coates, Timothy J. 1998 *Degredados e Órfãos: colonização dirigida pela coroa no império português. 1550-1755*. tr. José Viera de Lima. Comissão Nacional Para As Comemorações dos Descobrimentos Portugueses.
- Correia, José Manuel 1997 *Os Portugueses No Malabar(1498-1580)*. Imprensa Nacional - Casa da Moeda.
- Diffie & Winius: Bailey W. Diffie and George D. Winius(eds.) 1977 *Foundations of Portuguese Empire 1415-1580 (Europe and the World in the Age of Expansion vol I)*. University of Minnesota Press / Oxford University Press.
- Disney, Anthony R. 2009 *A History of Portugal and the Portuguese Empire-From Beginning to 1807 vol.2: The Portuguese Empire*. Cambridge.
- Duncan, Thomaz Bently 1986 "Navigation between Portugal and Asia in the sixteenth and seventeenth centuries", in Cyriac K. Pullapilly and Donald Frederick Lach(eds.) *Asia and the West: encounters and exchanges from the age of explorations: essays in honor of Donald F. Lach*. Cross Culture Publications, Inc.
- Forjaz & Noronha: Jorge Forjaz e José Francisco de Noronha(eds.) 2003 *Os Luso-Descendentes da Índia Portuguesa (I - III)*. Fundação Oriente.
- Godinho, Vitorino Magalhães,1978 "Lémigration portugaise(XVeme-XXeme siècles)-une

- constante structurelle et les responses au changements du monde”, *Revista de de História Económia e Social. I.*
- Lacerda, Teresa 2004 “A nobreza na Carreira da Índia no reinado de D. João III -uma avaliação social”, *D. João III e o império: Actas do Congresso Internacional comemorativo do seu nascimento (Lisboa e Tomar, 4 a 8 de Junho de 2002)*. Lisboa, pp.401-416.
- Malekandathil, Pius 2001 “The Portuguese Casados and the Intra-Asian trade:1500-1663”, *IHC: Proceedings, 61st (Millennium) Session*, pp.385-406.
- Mathew, Kallor Puthenparambil Mathen Abraham 1988 *History of the Portuguese Navigation in India*. Milttal Publication.
- Newitt, Malyan 2005 *A History of Portuguese Overseas Expansion, 1400-1668*. Routledge.
- Pearson, N. Michael 1987 *The Portuguese in India*. Cambridge University Press.
- Russell-Wood, A. J. R. 1992 *The Portuguese Empire 1415-1808-A World on Move*. The Johns Hopkins University Press.
- 2007 “Pattern of Settlement in Portuguese Empire, 1400-1800”, in Francisco Bethencourt and Kirti Chaudhuri(ed.) *Portuguese Oceanic Expansion, 1400-1800*, Cambridge University Press, pp.161-196.
- Subramahnyam, Sanjay 1993 *The Portuguese Empire in Asia 1500-1700*. Longman.
- Thomaz, Luis Felipe F. R. 1994 *De Ceua À Timor*. Difusão Editorial. S. A.
- Winius, George Davison 1985 *The Black Legend of Portuguese India (XCHR Studies Series no.3)*. New Delhi: Concept Publishing Company.

(日本語文献)

- 秋田 茂・桃木至朗 2013 「グローバルヒストリーと帝国」、秋田 茂 桃木至朗(編)『グローバルヒストリーと帝国』大阪大学出版会、pp.9-45。
- 市之瀬敦 2000 『ポルトガルの世界—海洋帝国の夢のゆくえ』社会評論社。
- 2004 『海の見える言葉 ポルトガル語の世界』現代書籍。
- 齋藤俊輔 2010 「ディオゴ・デ・コウト『老兵との対話(第一の書)』を読む(特集「現代の日本像」に寄せて)」大東アジア学論集 第10号、pp.173-180。
- 高橋裕史 2006 『イエズス会の世界戦略』講談社。
- 羽田 正 2007 『東インド会社とアジアの海(興亡の世界史15)』講談社。
- 浜岡 究 2006 『ブラジルの発見とその時代—大航海時代・ポルトガルの野望の行方』現代書籍。
- ピアスン、マイケル・ネイラー 1984 『ポルトガルとインド—中世グジャラートの商人と支配者』(生田滋 訳)岩波現代選書。
- 山下範久 2008 「世界システム論からグローバル・ヒストリーへ」水島 司(編)『グローバル・ヒストリーの挑戦』山川出版社、pp.77-90。